

日韓両地域における寺院の造瓦体制の比較研究

－ 8世紀を中心に－

林 正 憲

1. はじめに
2. 奈良時代における寺院の造瓦体制
3. 慶州地域における寺院の造瓦体制
4. まとめ
5. おわりに

要 旨 日本列島の寺院は官寺の成立と共に、造寺司なる寺院造営の専属組織が設置される。この造寺司の活動は各寺院の歴史的背景とその展開に応じて異なるが、概して平城宮の造瓦体制とは一定の距離を置き、独自性を持って展開していた姿が窺える。しかし、奈良時代後半に造東大寺司が成立すると、その影響は各寺院のみならず、長岡京や平安京にまで及んでいたことが明らかとなった。一方、朝鮮半島における寺院では、日本に比して多種多様な瓦を用いると共に、日本では一般的な軒瓦のセット関係がみられないという状況が確認できる。しかし、これが8世紀後半になると、セット関係がみられる寺院が出現し、造瓦体制に何らかの変化が生じたことが指摘できる。また金丈里瓦窯の状況においても、やはり多様性が指摘でき、日本の瓦窯のあり方と異なることがわかる。そして両地域の比較を通じて、彼我の地域においてこのような差違が生じた原因として、日本列島では官寺成立以前の状況に大きく影響を受けていること、また慶州地域でもその造瓦体制の淵源たる百済の造瓦体制の影響が強いことを指摘した。その結果、建物における軒瓦の文様の統一性などに対する意識についても、両地域で大きく異なる状況に至ったのである。

キーワード 造寺司 瓦窯 セット関係 複数瓦窯複数寺院型

1. はじめに

古代東アジアにおいて、国際宗教たる仏教の広がりとともに、その布教拠点とでも言うべき寺院が東アジア各地において無数に造営された。それは、今回取り上げる日本列島と朝鮮半島においても例外ではない。特に日本列島の場合、寺院の初現である飛鳥寺が百済の技術を導入することによって造営がおこなわれた経緯もあり、朝鮮半島との関係が極めて深い。それは、同時に導入された造瓦技術においても同様のことが指摘できよう。

ただし、その後の日本列島と朝鮮半島において、寺院の造営や造瓦技術が独自の発展を見せるにつれて、彼我の地域差は次第に大きくなっていった。そして今回検討の対象とする8世紀、すなわち日本列島では平城京の時代であり、朝鮮半島では統一新羅の時代になると、寺院造営をとりまく環境は大きく異なっていたと考えられる。

しかし、これまでの研究を振り返ってみても、両地域の寺院造営がどのように異なるか、その比較研究は驚くほど少ない。そこで本稿では、寺院造営の状況を克明に反映していると考えられる寺院の造瓦体制に焦点を当て、そこから両地域の造瓦体制を比較するとともに、その共通点と相違点を明らかにしながら、その原因となった背景について、論じることにした。

2. 奈良時代における寺院の造瓦体制

(1) 奈良時代以前の状況

初期寺院の造瓦体制 それではまず、奈良時代以前の寺院と瓦窯の関連について概観しておきたい。

日本に瓦生産が導入された6世紀末から7世紀前半における寺院と瓦窯の状況については、既に上原真人が整理をおこなっている¹。それによると、瓦生産は「消費地近接型」と「遠隔地型」の2つの類型に分類できる。前者の近接型は飛鳥寺など、瓦窯が寺院地に近接した位置に営まれるもので、主に瓦専業窯に見られるものである。一方、遠隔地型は豊浦寺と隼上り瓦窯（京都府）や、四天王寺と楠葉平野山瓦窯（京都府・大阪府）の関係のように、瓦窯と寺院地が遠く離れて営まれるものである。この類型は一般的に瓦陶兼業窯に見られることが多く、しかも須恵器生産地で瓦生産が開始されるケースは比較的少なく、むしろ瓦生産と須恵器生産が同時に開始されることが多いようである。

この状況が大きく変化を見せるのは、7世紀後半における「官寺」の成立以降である。この段階の官寺としては元興寺（飛鳥寺）、川原寺、大官大寺、本薬師寺があげられるが、これらは朝廷の直営事業として造営されるため、いずれも「造寺司」が設けられた上で、それらの所管となる瓦窯にて所用瓦が生産されるようになる。この場合、瓦窯は近接型と遠隔地

型が混在しているようである。

宮都の瓦 7世紀末、藤原宮における瓦の導入は、瓦が寺院のような宗教施設のみならず、公的な建造物にも用いられるようになった点で、大きな画期といえよう。この段階の瓦生産は、宮中枢部に関しては瓦窯が近接地に営まれ、集中的に供給される体制をとっている。しかし、それだけでは生産が追いつかなかったせいも、大垣などの宮縁辺部の瓦は遠隔地において生産されている。

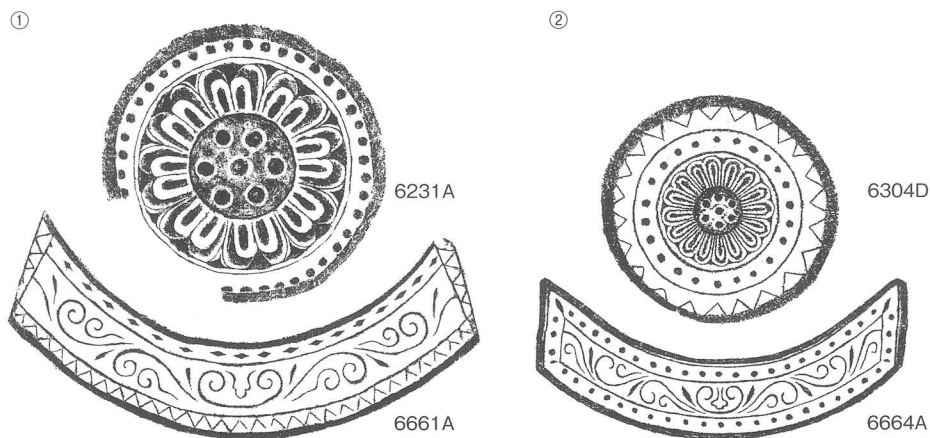
これと比較すると、平城宮における瓦の生産体制は極めて集中的な生産体制へと転換している。すなわち、平城宮の北方5kmに位置する平城山瓦窯跡群において生産・供給されるようになるのである。これらの瓦窯は造宮職や宮内省木工寮などによって管理されていたと考えられ、後には皇后宮職や修理司なども所管瓦窯を有するにいたる²。

(2) 平城京内寺院の瓦生産

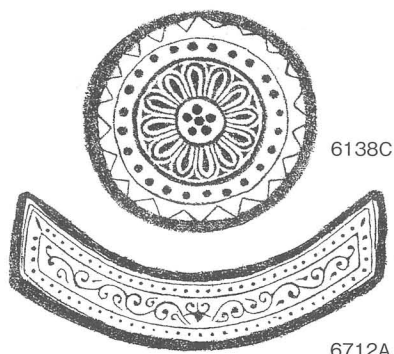
寺院の成立事情 平城京における寺院の成立事情は一様ではない。そして、この成立事情に応じて瓦の生産体制がそれぞれ異なった様相を見せている。それらを概観すると、概ね3つの類型に分類することができる。すなわち、① 藤原京内寺院との関連性が深いもの、② 平城京において新造されるもの、③ 奈良時代後半における造東大寺司の影響下のもとで成立するもの、である。このうち①に相当する寺院として大安寺、元興寺、薬師寺が、②には興福寺、法華寺、③には東大寺、西大寺、西隆寺があげられる。それでは以下、各寺院の成立状況について簡単にまとめていきたい³。

① 藤原京と関連の深い寺院

大安寺 大安寺は霊亀二年(716)、藤原京より移建するかたちで平城京に造営された。これは、和銅四年(711)に藤原京において造営途中であった大官大寺が焼亡してしまったことによる。そのため、創建当初の大安寺の所用瓦としては、大官大寺からもたらされた



第1図 大安寺所用瓦① (1:6)



第2図 大安寺所用瓦② (1:6)

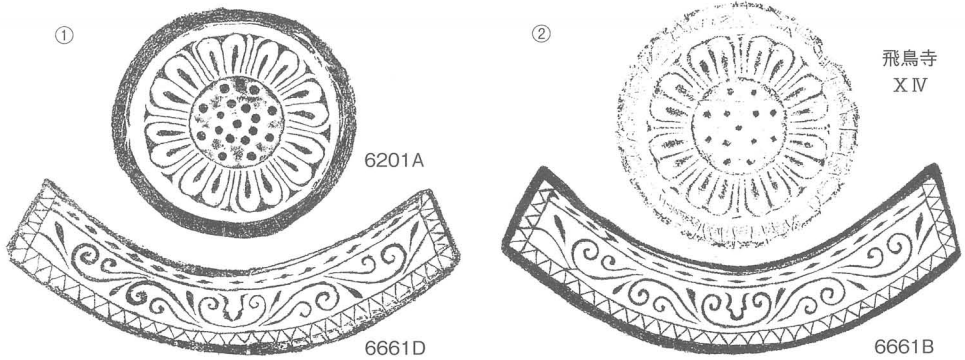
6231A-6661Aのセットが用いられることになる(第1図①)。このことから、大官大寺の造営に携わっていた造大官大寺司が、そのまま大安寺の造営に携わっていたことが伺える。ただし、現状では6231A-6661Aを生産した瓦窯は明らかになっていない。

さらに大安寺では、創建当初の補足瓦として6304D-6664Aも確認できる(第1図②)。これは典型的な平城宮式軒瓦であり、6304Dは内裏東外郭から多く出土し、6664Aは第一次大極殿院などから多く出土する。ただし、大安寺出土のこのセットは『大安寺伽藍縁起并流記資材帳』に記された造大安寺司所管の「棚倉瓦屋」と目される、石橋瓦窯(京都府)で生産されたことがわかっている。したがって、平城宮における瓦生産体制が造大安寺司に移植され、その結果として平城宮式軒瓦が補足瓦として用いられるようになった状況が窺える。その背景としては、やはり大官大寺から大安寺の移建に伴い、十分な瓦の供給体制を整えることを急務としたため、新たに平城京において瓦窯を備える必要が出てきたためと言えよう。

これが奈良時代後半になると、6138C-6712Aからなる、いわゆる「大安寺式軒瓦」が成立する(第2図)。この大安寺式軒瓦の成立時期に関してはいくつかの説があるが、中井公の整理によると、概ね749~757年の成立と推定される⁴。この大安寺式軒瓦は伽藍に近接する杉山瓦窯で生産され、僧坊の建て替え時に使用されたものと考えられる。この大安寺式軒瓦は、6304D-6664Aとは異なり、平城宮からは出土しない。このことから、奈良時代後半においては造大安寺司が独自に造瓦体制を整備していた状況が窺える。

元興寺 元興寺は養老二年(718)創建の寺院である。『続日本紀』などでは藤原京に存在した法興寺(飛鳥寺)を移建した、との記述もあるが、実際には飛鳥寺は藤原京で存続し続けていることから、基本的には新造されたと判断して差し支えない。その元興寺創建時の所用瓦であるのが6201A-6661Dである(第3図①)。これらは平城宮式軒瓦ではなく、元興寺独自の瓦として製作されたものであるが、その瓦窯については不明である。

ただし、この6201A-6661Dのモデルとなったであろう軒瓦が飛鳥寺に存在する。それが飛鳥寺XIV-6661Bである(第3図②)。これを見ると、両セットが非常に類似していることがわかる。また、興味深い事実として6201A-6661Dが飛鳥寺からも出土する点が指摘できる。これらのことを勘案すると、瓦窯の状況こそ明らかでないものの、飛鳥寺と元興寺の瓦窯体制はほぼ同一のものと考えられ、その結果、類似した軒瓦のセットが両寺院から出土することになったのであろう。

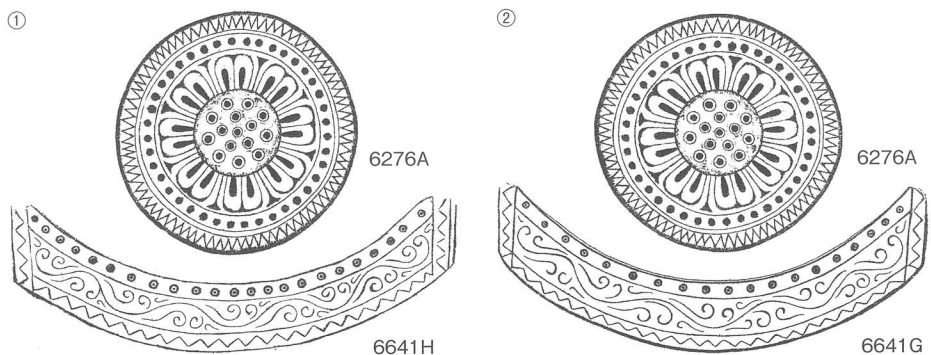


第3図 元興寺(左)と飛鳥寺(右)の瓦(1:6)

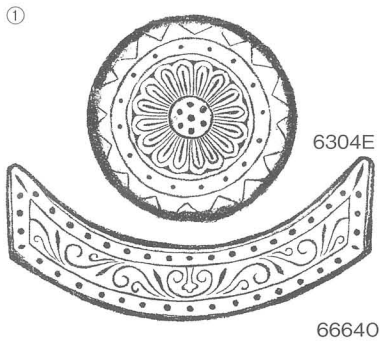
薬師寺 『続日本紀』によると、養老三年(719)に「始めて造薬師寺司を置く」との記載がある。したがって、その年に平城宮における薬師寺の造営が開始されたことがわかるが、この薬師寺が新造であるか、あるいは藤原京における本薬師寺の移建であるか、本尊の薬師如来の美術様式の問題なども巻き込んで、長年論争が闘われてきた。

しかし本薬師寺の発掘調査が進展し、出土瓦の状況も明らかになってくると、その論争も概ね決着を見ることとなった⁵⁾。具体的に説明すると、本薬師寺の所用瓦である6276A-6641H(第4図①)であるが、これが薬師寺の創建期においては6276A-6641G(第4図②)となり、軒丸瓦は共通するものの、軒平瓦においては新たな型式が生み出されている。そして、薬師寺の6276A-6641Gのセットで、さらに範傷の進んだものが本薬師寺の西塔周辺から出土していることがわかった。以上のことから、薬師寺造営に併行するように本薬師寺の西塔の建造がおこなわれていることから、本薬師寺からの移建は想定し得ず、平城京の薬師寺は新造であることが明らかとなったのである。

さらに、6276A-6641Gが薬師寺と本薬師寺の両方から出土していることは、両寺院の造瓦体制が基本的には同一であったことを示している。本薬師寺の瓦窯としては奈良県南部に位置する牧代瓦窯が知られているが、薬師寺の瓦も基本的には牧代瓦窯からもたらされたも



第4図 本薬師寺(左)と薬師寺(右)の瓦(1:6)



第5図 薬師寺所用瓦 (1:6)

のと考えられる。

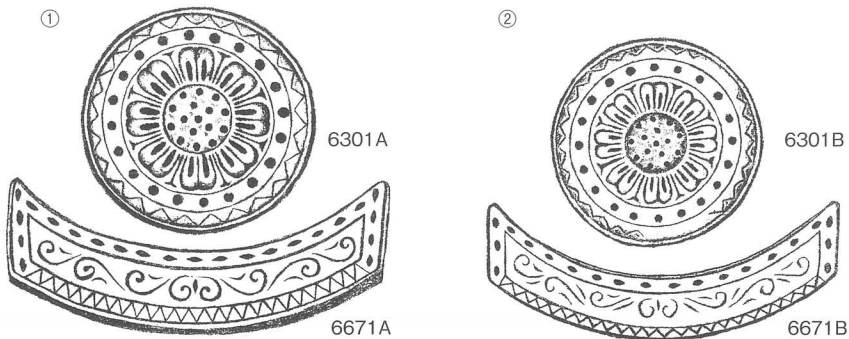
一方、創建期の薬師寺においては平城宮式軒瓦も使用されている。それが6304E-6664Oである(第5図)。これらは僧坊などの周辺施設から出土していることから、補足用として用いられていたようである。ただし、これらのセットは平城宮からは出土していない。すなわち、文様自身は平城宮式軒瓦に系譜が認められるものであるが、あくまで薬師寺においてのみ使用されていた瓦なのである。このこと

は、造薬師寺司が平城宮の造瓦体制と関連性をもちつつも、基本的には別個に活動していた様子が窺える。なお、このセットを生産していた瓦窯については不明であるが、製作技法なども6276A-6641Gとは大きく異なることから、牧代瓦窯とは異なる瓦窯で生産されていた可能性が高い。

② 平城京で新たに造られる寺院

興福寺 興福寺は和銅三年(710)に創建された藤原氏の氏寺であり、藤原京に存在していたと思われる厩坂寺からの移建とされている。ただし、考古学的には厩坂寺の状況も不明であるため、移建の事実は確認されていない。興福寺で興味深いのは、藤原氏の氏寺であるにもかかわらず、養老四年(720)に藤原不比等が死去すると、「造興福寺仏殿司」が置かれて「官」による造寺体制が整えられる点である。これは当時の藤原氏の権勢を反映しているとはいえ、平城京においては唯一の事例であることから、極めて異例といえる。

その興福寺の創建期の軒瓦として、6301A-6671Aがあげられる(第6図①)。これは、平城山丘陵に位置する梅谷瓦窯(京都府)において生産されたことが明らかとなっている。この瓦には布目押圧技法など、藤原宮式軒瓦などにも認められる製作技法が用いられているが、文様自身は過去に系譜を引くものではなく、興福寺において新たに採用された独自の文



第6図 興福寺(左)と平城宮(右)の瓦 (1:6)

様と位置づけられよう⁶。

一方、平城宮式軒瓦においてはこの興福寺所用瓦と極めて類似した軒瓦が存在する。それが6301Bと6671Bである（第6図②）。6301Bは内裏周辺域から、6671Bは東方官衙地区からそれぞれ出土しているため、セットではなかったようであるが、興福寺の影響を受けて成立する平城宮式軒瓦が存在していることは注目すべきである。前出の薬師寺や大安寺のように、平城宮式軒瓦が寺院所用軒瓦に影響を与えているケースは少なくないが、興福寺のように、寺院所用軒瓦が平城宮式軒瓦に影響を与えるケースは、後に触れる東大寺式軒瓦も含め、きわめて希なことと言える。このように、興福寺の造瓦体制は限定的ではあるが、平城宮の造瓦体制にも影響を与えていたことが指摘できよう。

法華寺 法華寺は、天平十三年（741）に「法華滅罪之寺」として総国分尼寺に任ぜられる大寺院であるが、極めて複雑な歴史的展開を経ている。そこで、まずは法華寺の成立過程とその後の展開について整理し、その後に各時期の軒瓦の様相についてまとめることとする。

まず、法華寺成立以前、平城遷都の際に当該地に営まれたのが藤原不比等邸である。そして養老四年（720）に藤原不比等が亡くなると、その地を娘である光明子が伝領したものと考えられる。そして天平元年（729）に光明子が皇后に冊立された際には、この地には皇后宮職が営まれたようである。そして天平十七年（745）の平城遷都の後、皇后宮は「宮寺」なる寺院に改築される。既に天平十三年（741）には総国分尼寺である「法華滅罪之寺」なる呼称は存在するようだが、天平十八年（746）までは「宮寺」としてしか文献には登場せず（『官寺三綱牒』など）、「法華寺」の初見は天平十九年（747）まで待たねばならない（『正倉院文書』など）。とはいえ、平城遷都以降には寺院として機能し始めていたことには間違いない。

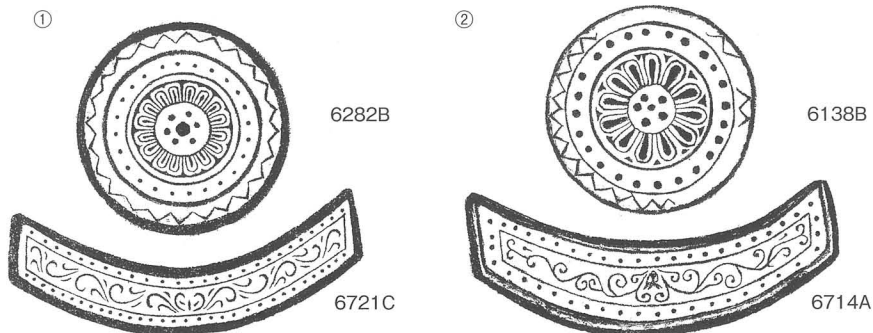
そして、法華寺として本格的に伽藍整備が始まるのは天平宝字年間である。まず、「造法華寺判官」の名称が初見されるのは天平宝字二年（758）である（『続日本紀』）。そしてその翌年の天平宝字三年（759）には金堂の造営が開始され、完成するのがその翌年のことである（『造金堂所解』）⁷。他の堂塔については文献に登場しないが、おそらくは順次築造が開始されていったことと想定される。そして天平宝字五年（761）には、その前年に亡くなった光明皇太后の追善のために、法華寺の南側に阿弥陀浄土院が建てられる。この段階で、概ね法華寺の伽藍整備も終了していたと考えられよう。

それでは以上を踏まえた上で、法華寺所用瓦の変遷とその特徴について述べておきたい。ただし、本来ならば藤原不比等邸所用瓦から論じるべきであろうが、今回はあくまで寺院所用瓦の分析を主たる目的としているため、平城遷都後の「宮寺」成立以降についてのみ触れることとする⁸。

その「宮寺」所用瓦のセットであるが、6282B-6721Cがその候補としてあげられる（第7図①）。しかし、このセットは平城宮において非常に多用されるセットなのである。これまで触れてきた寺院においては、平城宮式軒瓦が使用されることはあっても、それはあくまで補足用など、主体を占めることは決してなかった。ところが、この「宮寺」の段階では平城宮式軒瓦が主要な所用瓦として用いられているのである。

これは、「宮寺」の成立から法華寺の本格的伽藍整備までの歴史的展開がその背景となっている。まず、「造法華寺司」の初見が天平宝字年間まで降ることを考えると、「宮寺」成立段階に造寺に携わる専属の官営組織は存在しなかったと考えられる。とはいえ、造寺に携わる何らかの組織が存在しない限り、「宮寺」の整備はおこなわれなかったであろう。そこで考えられるのが、「宮寺」の整備に際して、皇后宮職が主体的な役割を示した可能性である。「宮寺」の前身たる皇后宮の瓦を見ると、いずれも平城宮式軒瓦との強い共通性が見られる⁹。したがって、皇后宮職は平城宮の造瓦体制を一部借用するかたちで瓦を確保しているものと判断できる。これは、平城遷都後も同じ状況であったことだろう。6282B-6721Cを生産していた瓦窯については未だ明らかにされていないが、このセットの平城宮からの出土数を考慮に入れると、基本的には平城宮の造瓦体制によって供給されていたと考えて差し支えない。そして、平城宮の造瓦体制と深い関連をもつ皇后宮職によって「宮寺」の整備がおこなわれたため、その所用瓦は平城宮式軒瓦となったのであろう。

これが天平宝字年間に入って造法華寺司が成立すると、状況に変化が見られる。法華寺金堂の所用瓦と考えられるのが6137C-6716A、6138B-6714Aのセットであるが（第7図②）、これらが平城宮から出土することはほとんどなく、法華寺独自の瓦と判断できる。また、これらのセットは音如ヶ谷瓦窯（京都府）で生産されたことが明らかになっており、造法華寺司が独自に瓦窯を所管していることが窺える。すなわち、造法華寺司の成立と共に平城宮の造瓦体制とは一線を画し、独自の造瓦体制を営むようになったといえよう。



第7図 法華寺所用瓦（1：6）

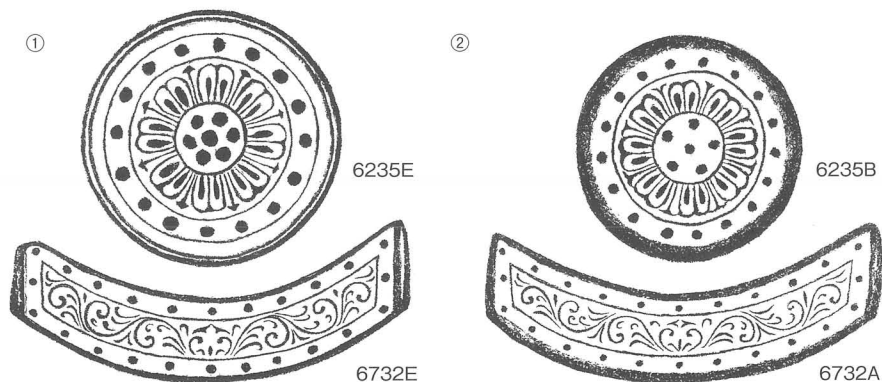
③東大寺との関連で成立する寺院

東大寺 総国分寺たる東大寺は巨大な廬舎那仏で有名であるが、その大仏は天平十七年（745）に造立が開始される。その大仏の巨大さゆえ、その時はまだ伽藍の造営に着手されていない段階である。大仏造立が一段落し、本格的な伽藍整備が開始される契機となるのは、造東大寺司の設置である。その名称が文献に初めて見られるのが天平二十年（748）のことであるから、その頃から東大寺の伽藍整備が開始されたと判断してよい。それと時を同じくして、いわゆる「東大寺式軒瓦」が成立するわけだが、その成立以降、奈良時代後半の造瓦体制に多大な影響を与えていたことがわかっている。以下ではその状況を整理してみたい。

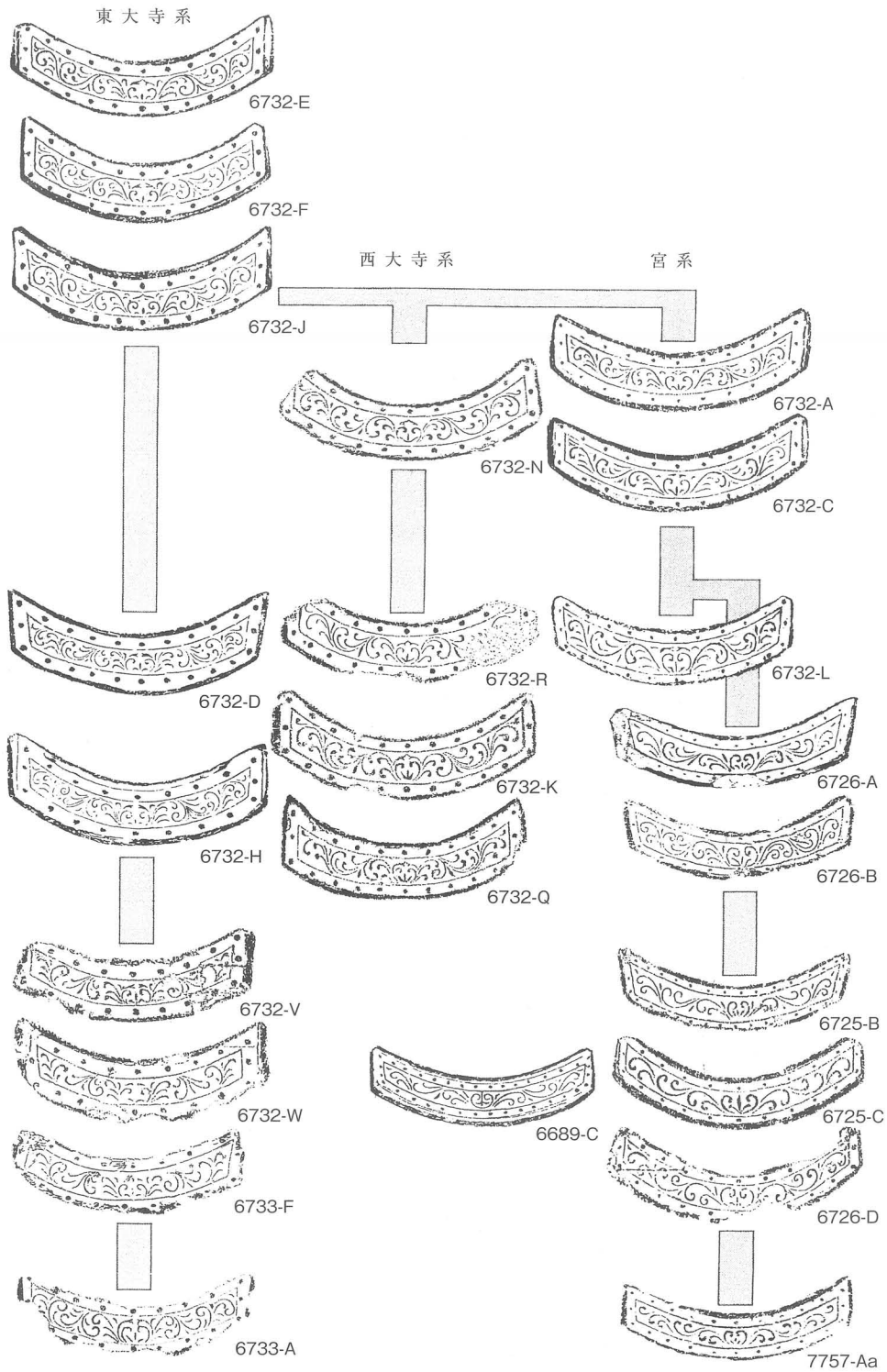
いわゆる東大寺式軒瓦のうち、最も古い相を示すのが6235E-6732Eのセットであり、これらは奈良県荒池瓦窯産と考えられている（第8図①）。そしてこれを端緒として、東大寺式軒瓦は多様な発展を遂げていくわけだが、そのうち6732型式に注目して整理した花谷浩と山崎信二の研究によると、東大寺式軒瓦は文様や製作技法の点において、概ね3つの系統に分かれることが明らかとなった¹⁰。すなわち、「東大寺系」と「平城宮系」、「西大寺系」である（第9図）。

「東大寺系」は東大寺や新薬師寺などで顕著に見られるもので、直接的に造東大寺司と関係を有している一群である。それらの6732型式の製作技法は、粘土塊を用いてそれらを固めながら成形し、凸面には縦方向のヘラケズリを施すという特徴を持つ。そしてこれらの技法を持つ集団は後に平安京の西寺の造瓦にも携わっていたことが明らかとなっている¹¹。

次に平城宮系は、その名の通り平城宮を中心に用いられ、称徳天皇の「西宮」所用瓦である6235B-6732Aのセットがその代表例と言えよう（第8図②）。このセットは市坂瓦窯産であることがわかっている。この6732型式は1枚の粘土板から軒平瓦を成形し、凸面には縦縄叩きを施すという特徴を持つ。そして、同様の技法を持つ集団はのちに長岡宮の造瓦に携わ



第8図 東大寺（左）と平城宮（右）の瓦（1：6）



第9図 東大寺式軒瓦における3つの系列 (毛利光・花谷 1991)

っているようである¹²。

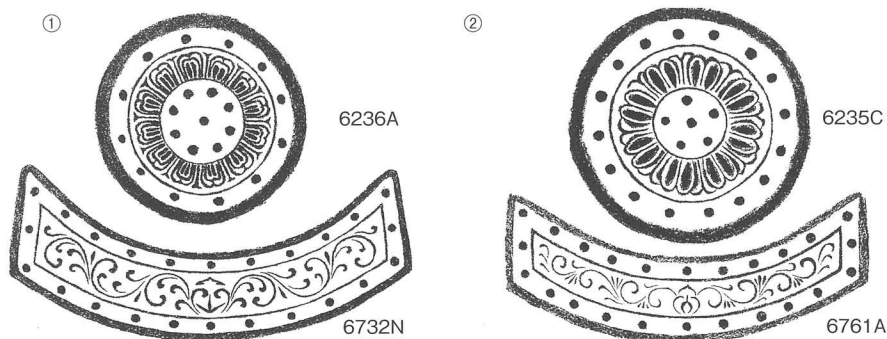
そして最後が「西大寺系」である。これらは西大寺および西隆寺で顕著に見られるものである。両寺の瓦については後に詳述するため、ここではその技法についてのみ触れておく。西大寺系の6732型式は薄い粘土板を重ねることによって成形し、その後、凸面に布目押圧を加えて調整するという特徴を持つ¹³。

このように、造東大寺司の手によって作り出された東大寺式軒瓦であるが、その影響は他の寺院のみならず、平城宮の造瓦体制にも大きな影響を与えていることがわかる。ただし、影響を受ける側の製作技法に関する独自性は保たれており、東大寺式軒瓦という大きな枠組みの中で、各々独自の造瓦体制の展開を見せている点も、奈良時代後半の大きな特徴と言えよう。

西大寺と西隆寺 両寺院はともに称徳天皇の庇護のもとに成立した寺院である。東大寺と法華寺は総国分寺と総国分尼寺として対になっているが、西大寺と西隆寺も僧寺と尼寺として対になっていたようで、父親たる聖武天皇の造営した東大寺・法華寺に劣らぬよう、称徳天皇が並々ならぬ情熱を傾けて両寺を造営した状況が窺える。

西大寺は天平神護元年（765）に創建され、天平神護三年（767）に設置された造西大寺司によって伽藍の造営がおこなわれたことが明らかとなっている。そして伽藍全体の詳細な記述が記載された『西大寺資材流記帳』が編纂される宝亀十一年（780）頃には、伽藍の整備がほぼ終了していたようである。一方、西隆寺に関しても造西隆寺司が天平神護三年（767）に設置されていることから、西大寺と期を一にして造営が開始されていることがわかる。その後、西隆寺が文献に登場する機会はさほど多くないが、宝亀二年（771）頃には伽藍の整備が終了していたようである。

その西大寺所用瓦と西隆寺所用瓦は、いずれも西大寺系の東大寺式軒瓦である（第10図）。もちろん、今回掲げたセットの他にも、各堂塔において多岐に渡る軒瓦のセットが見受けられるが、いずれも東大寺式軒瓦の系譜を引くものである。ただし、両寺院の瓦を



第10図 西大寺（左）と西隆寺（右）の瓦（1：6）

生産していた瓦窯については未だ明らかにされていない。

これらの瓦に東大寺式の影響が見られる原因の一つに、佐伯今毛人なる人物の活躍が推定される。この佐伯今毛人は初代の造西大寺司長官であるが、実は天平二十年（748）の段階で造東大寺司次官を務め、天平勝宝七年（755）と天平宝字七年（763）には造東大寺司長官に任ぜられている。このような経歴をもつ人物が西大寺の造営に携わっていたことから、造瓦の面においても東大寺の影響が認められるに至ったと考えられる。もちろん、西隆寺に関しても西大寺と一体として造営が進められていたことから、その影響が及ぶことになったのであろう。ただし、先にも触れたが東大寺系と西大寺系とでは製作技法が異なっていることから、両者の独自性も十分に発揮されていた状況が窺える。

(3) 小 結

それでは以上で述べてきた奈良時代における各寺院の造瓦体制について、重要な点にしばってまとめておきたい。

まず指摘できるのは、奈良時代の寺院の造営において「造寺司」は欠くことのできない存在だということである。藤原京の時代から官の手によって造られた寺院、すなわち「官寺」は存在しているが、既にこの段階で造高市大寺司（天武天皇二年（673）、高市大寺は後に改名して大官大寺となる）や造薬師寺司（大宝元年（701））などの存在が文献から知られる¹⁴。この造寺司の出現については、円滑な寺院造営をおこなうために比較的独立性の高い専門組織を設けるという点で、純粋に実務的な理由であった可能性が高いが、結果として、造瓦体制においても寺院ごとの個性が強調されることになった。

その独自性がもっともよく現れているのが寺院所用軒瓦の状況である。先にも整理したように、成立期の法華寺のような特殊な例を除くと、基本的に寺院所用軒瓦と平城宮式軒瓦は区別して用いられている。これは、平城宮の造瓦体制と寺院の造瓦体制が基本的には分離して存在していたことを示している。ただし、文様や製作技術に関する交流は存在していたようで、平城宮式軒瓦をモデルとした寺院所用軒瓦や（薬師寺の6304E-6664Oなど）、寺院所用軒瓦の影響を受けた平城宮式軒瓦（6301B-6671B、6235B-6732Aなど）の存在は、その事実を端的に示している。これは寺院間においても同様に、東大寺式軒瓦に見る東大寺系と西大寺系の並立などは、その例証と言えよう。

次に指摘できるのは、造寺司が単一の寺院だけではなく、比較的距離のある複数の寺院の造営に携わっていたという点である。すなわち、藤原京から平城京への遷都にともなって、かつては寺院についても移建されたとのイメージが強かったが、これまでの整理でも明らかなように、純粋に移建されたのは焼亡という予想外の事態が生じた大官大寺（＝大安寺）だけである。しかも、その大安寺と元興寺の造営に関しては、造大安寺司（＝造大官大寺司）と造元興寺（＝造法興寺司）が藤原京と平城京の両方で活動するとともに、両

京における寺院造営・整備に一貫して携わっていた状況が窺えるのである。

その中で、造東大寺司の出現は奈良時代後半の寺院造営に計り知れない影響を与えた。そしてそれは平城京内寺院にとどまらず、平城京の造瓦体制のほか、長岡京や平安京の西寺にまで影響を及ぼすにいたる。これは、造東大寺司なる組織が単一の寺院造営組織というだけでなく、他の造寺司（造西大寺司や造西隆寺司など）に対して主導的地位を保っていたことに起因するのであろう¹⁵。

そして、視点を転じて造瓦体制の根幹に関わる瓦窯そのものの築窯技術に注目した場合、実はここにも造東大寺司の影響が及んでいる可能性がある。それは、有牀式平窯の普及の問題についてである。有牀式平窯は奈良時代後半以降、平安時代にいたるまで一般的に普及する瓦窯構造であるが、現状で発見されている有牀式平窯のうち、出現期のものを見てみると、そこではいずれも東大寺式軒瓦が見られるのである。

まず、造東大寺司所管の荒池瓦窯であるが、これについては奥村茂輝の紹介が詳しい¹⁶。それによると、永承二年（1047）に書かれた『造興福寺記』では、当時の造興福寺司長官であった藤原資仲が荒池瓦窯を一度発掘し、その後その窯を作り直した後にもう一度瓦窯として使ったとの記述がある。永承二年（1047）の段階で最も普遍的であった窯構造は有牀式平窯であり、その時期に再利用が可能であった窯構造であることを考慮に入れると、荒池瓦窯も有牀式平窯であった可能性が高いのである。






































次に、平城山丘陵の瓦窯を見てみると、現状有牀式平窯が検出されているのは市坂瓦窯と五領池東瓦窯である¹⁷。このうち、市坂瓦窯は称徳天皇の「西宮」所用瓦である6235B-6732Aを生産していた瓦窯である。また、五領池東瓦窯は阿弥陀浄土院所用瓦を生産していた瓦窯と考えられているが、この壁体には東大寺系の6732F¹⁸が使用されていた。このような点を考慮に入れると、両瓦窯についても造東大寺司の影響が見て取れるのである。したがって、造東大寺司の影響は軒瓦の文様などにとどまらず、その瓦を製作する瓦窯そのものの築窯技術にまで及んでいる可能性が高い。

このように、奈良時代を通じて寺院の造瓦体制に大きな影響を与えていたのは、その造営を所管する造寺司なる組織の存在だったことがわかる。



































3. 慶州地域における寺院の造瓦体制

(1) 寺院における瓦の状況

皇龍寺と芬皇寺 皇龍寺は真興王十四年（553）に創建された、新羅地域最大の寺院である。584年に金堂を建立し、645年には百済の阿非知を招いて、高さ80mにも達する木造九重塔を建立した。かくして皇龍寺の建設は645年に木造の塔が完成するまで4代の王、93年間に及んだことがわかる。伽藍配置は中門・塔・金堂・講堂が南北に配置された一塔式

時期	수막새 文樣					
芬皇寺 創建期						
I-1期	<p>가 I Aa</p>      					
I-2期	  					
AD 650	    					
II期	    					
III期	   					
三國統一 무렵	   					
IV期	        					

第 11 図 芬皇寺出土瓦の編年案 (朴 2006)

時期	수막새 文様				
IV期 AD 750	 가 I B-2	 가 III a-2c	 나 II-1	 다 I-2	 마 II
V期 AD 850	 가 I C-1	 가 III a-3a	 나 II-2	 다 I-3	 다 II-4
VI期 AD 950	 가 III a-1c	 가 III a-2d	 마 III	 가 III a-3b	 가 III a-2e
VI期 AD 950	 가 III a-4a	 가 III a-2f	 가 III b-3	 가 III d-3	 라-1
VI期 AD 950	 라-2	 마 IV	 다 I-4	 다 II-5	 가 II a-3
VI期 AD 950	 가 II a-4	 가 III a-3c	 가 III a-3d	 다 II-6	 가 III a-4b
VI期 AD 950	 가 III a-4c	 가 III a-4d	 가 I C-2	 가 III a-4e	

伽藍配置を基本とし、中央の中金堂の左右に東金堂・西金堂が配されている。そして754年頃までには、塔の前方に左右対称に鐘楼と経藏も配置された。

その皇龍寺の北方に近接して造営されたのが芬皇寺である。芬皇寺の創建年代については文献に記されていないが、完成については『三国史記』に記載があり、それによると、善徳王三年、すなわち仁平元年（634）に完成したことが記されている。また『続高僧伝』の慈蔵伝によると、慈蔵が貞観十七年（643）に唐より帰国した時に王命（善徳王か）により大国統に任命され、「王芬寺」に住ませたとある。『続高僧伝』では、「王芬寺」について、「寺は即ち王の造るところなり」としていることから、芬皇寺のことであると思われる。『三国遺事』でも「命じて芬皇寺に住ましむ〔唐伝に「王芬」となす〕」¹⁹とあり、慈蔵が帰国後の住房は芬皇寺であったという認識にたち、『続高僧伝』の「王芬寺」は芬皇寺とみて間違いのないようである。

芬皇寺の創建期の伽藍配置は、現存する石塔を中心として、その北側に中金堂・東金堂・西金堂を配する一塔三金堂式である。そして、8世紀の中頃には中金堂において建て替えがおこなわれていたことが、発掘調査から明らかとなっている。

この皇龍寺と芬皇寺は、隣接して造営されていることに加え、完成の時期も近接していることから、併行して造営されていたものと考えられる。また、出土する瓦磚類に注目してみると、創建期に用いられたと考えられる高句麗系の7葉素弁蓮華文軒丸瓦が共通して出土していることや、同範と考えられる軒瓦も多数出土していることから、両寺院の造瓦体制は基本的には同一のものであったと想定される。

そして、両寺院の出土瓦の状況に共通して認められる最大の特徴は、その種類の多さである。例えば、皇龍寺においては蓮華文軒丸瓦だけで216種類が確認されている。また、芬皇寺においても蓮華文軒丸瓦は135種類が確認されている。もちろん、これは寺院の存続年数などの問題もあるので、そのままの数字を受け入れるわけにはいかないが、第11図に掲げた芬皇寺の瓦編年案²⁰を参考にすると、芬皇寺が完成する650年頃までにおいて、高句麗系の素弁蓮華文軒丸瓦や、百済系の蓮華文軒丸瓦、そして複弁蓮華文としては極めて初現期にあたる軒丸瓦など、実に多彩な瓦が用いられていたことがわかる。さらには、中金堂の建て替えがおこなわれる750年頃までを見ても、宝相華文を中心とした統一新羅期の流麗な軒丸瓦が多種類にわたって用いられているようである。

また、芬皇寺の発掘調査報告書²¹においては、軒瓦の各型式がどの地点から出土したかについて、情報が記載されているが、それを見る限りでは、特定の地点に特定の瓦が集中するような状況が確認できないため、おそらくは、1つの建物について複数の種類の軒瓦が用いられていると想定せざるをえない。

また、先に述べてきた日本の寺院においては、常に軒丸瓦と軒平瓦を「セット」として

とらえてきたが、皇龍寺や芬皇寺では軒丸瓦・軒平瓦の種類が極めて多岐にわたり、また出土状況等からでもセットを抽出することができない²²。

このように、日本の寺院とは大きく異なる様相を示す両寺院であるが、なぜそのような状況が生まれているのかについては、小結において詳述したい。

四天王寺 四天王寺は、文武王十九年（679）に創建された寺院である。日本にも四天王寺は存在するが、興味深いのは両者共に護国鎮護を目的として造営された寺院という事である。当時の新羅は唐と連合して百済と高句麗を滅ぼし、三国を統一することになったが、韓半島全体を支配しようという野心をあらわにした唐は、文武王十四年（674）に、50万の大軍を出兵させて新羅を攻撃した。この時、新羅は唐軍の撤退を祈願して四天王寺を建立したのである。『三国有史』によると、寺院建立に着工する前に唐軍が攻め寄ってくるという急報が入って来たため、強い神通力を持つと言われる明朗法師が祈願すると、大風が起こって唐の軍船は全部沈没してしまったとある。そして、その5年後に寺院が完成に至り、四天王寺と名づけられたと伝えられている。

四天王寺の伽藍配置は、金堂を中心に、東木塔と西木塔、北に左経楼・右経楼をもつ、いわゆる双塔一金堂式である。現在も発掘調査がおこなわれているため、出土瓦の全貌については報告書の刊行を待たねばならないが、2010年2月、筆者は出土瓦の多くについて実見する機会を得ることができた。そこで、以下ではその際に得た知見について触れることにしたい。

四天王寺においても、日本の寺院に比して軒瓦の種類は多い。ただし、先に述べた皇龍寺や芬皇寺ほど、バリエーションは多くない。これは、四天王寺の成立が統一新羅の成立以降であるため、古新羅系の軒瓦が見られないことがその一因ではあるが、そのような状況をふまえたとしても、種類の数がさほど多くない点は注目すべき事実である。

出土瓦の中で、興味深いのが複弁蓮華文軒丸瓦と忍冬文軒平瓦である（第12図）。この複弁蓮華文軒丸瓦は今回の発掘調査ではかなりの数がまとまって出土しており、皇龍寺や芬皇寺では複弁蓮華文軒丸瓦がさほど出土しないことから、四天王寺における特徴の一つといえる。また、忍冬文軒平瓦についても一定量出土しているが、複弁蓮華文同様、皇龍寺や芬皇寺ではほとんど出土していない瓦である。

そして、この複弁蓮華文軒丸瓦と忍冬文軒平瓦の製作技法について見てみると、瓦当の接合方法について共通する技法が認められるのである。複弁蓮華文軒丸瓦に関しては、瓦当と丸瓦を接合す



第12図 四天王寺出土瓦（約1：6）

る際に、① 丸瓦先端を歯車状にギザギザに加工するもの、② 瓦当裏面に刻み目を施すもの、③ 未加工のまま接合するもの、の3つの技法が認められる。そしてそれぞれの技法の差違が、瓦当文様の細かな差違に対応することから、概ね3つの流派からなるといえよう。このうち、①の技法が忍冬文軒平瓦と共通するのである。朝鮮半島の軒平瓦は、日本とは異なり、瓦当部と平瓦部を別々に成形したのちに接合する技法を採用しているが、この忍冬文軒平瓦に関しては、平瓦先端を歯車状に加工すると共に、瓦当裏面に指頭圧痕を施しているものもある。このことから、忍冬文軒平瓦を製作していた工人は、複弁蓮華文軒丸瓦の1流派を作っていた工人である蓋然性が極めて高いのである²³。

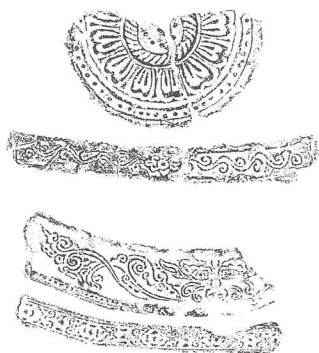
このように、四天王寺においては複弁蓮華文軒丸瓦と忍冬文軒平瓦が同様の技法によって製作されていることから、この軒丸瓦・軒平瓦が「セット」として成立していた可能性が極めて高い。最終的には、報告書の刊行を待って出土状況の分析をおこなう必要があるが、皇龍寺や芬皇寺では見られなかった事態が生じていることは注目に値しよう。

ただし、このセットが四天王寺創建期のものであるかどうかについては、議論の余地がある。これに関しては、現状では情報が足りないため、報告書の刊行を待ちたい。

仏国寺 仏国寺の創建は法興王十五年（528）のことであり、その当時は華嚴仏国寺、あるいは法流寺と呼ばれていたようである。その後、景德王十年（751）に当時の宰相、金大城によって実に17年間にわたる伽藍整備がおこなわれた。そしてそれが終了した恵恭王十年（774）、仏国寺という名称がつけられたようである。最盛期の8世紀には約60棟の木造建物が立ち並んでいたようである。

最近の発掘調査としては、慶州大学校博物館によって聖宝博物館建設予定地にておこなわれたものがある²⁴。この発掘によっても数多くの瓦が出土しており、筆者もそれを実見する機会に恵まれたため、今回はそれらを中心に紹介することとしたい。

出土瓦としては、複弁を基調とする重弁軒丸瓦と、鬼面唐草文軒平瓦がある（第13図）。



これらの時期としては、統一新羅の後半、8世紀後半から9世紀前半頃に属するものと考えられる。これらの瓦の特徴に、軒丸瓦の瓦当側面と軒平瓦の顎面に、花文や唐草文からなる施文が施されている点があげられる。そしてこれらの施文を子細に見ていくと、軒丸瓦と軒平瓦とで共通の文様を持つことが明らかになった。したがって、これらの重弁軒丸瓦と鬼面唐草文軒平瓦は同一の工人集団によって製作された「セット」と考えることができる。

第13図 仏国寺出土瓦（1：6）

また、鬼面唐草文軒平瓦に関しては、個体によって文

様に多少の差違はあるものの、基本的にはすべて同じスタイルで統一されていることがわかる。これは、今回の発掘調査地で検出された建物のいくつかは、この重弁軒丸瓦と鬼面唐草文軒平瓦という文様で統一された屋根を有していたことを示している。かつて、皇龍寺や芬皇寺などで見られた1つの建物に複数の文様からなる軒瓦を用いていたのに比べると、仏国寺の状況は、日本の寺院における軒瓦のあり方に似通ってきたことが指摘できよう。

(2) 瓦窯の状況

慶州地域ではその周辺部の丘陵地に瓦窯が点々と営まれている。しかし、発掘調査がおこなわれたものは少なく、多くは表面採集で瓦が確認されているのみである。したがって、慶州地域の瓦窯の状況については今後の検討課題であるが、今回は金丈里瓦窯の状況についてのみごく簡単に触れておきたい。

金丈里瓦窯は慶州地域の北西部に位置する瓦窯であるが、1978年に緊急発掘調査がおこなわれ、その際に多数の瓦が出土した。それらは概ね8世紀以降の瓦と考えられることから、瓦窯の操業時期もそれ以降と考えられる。隣接して古新羅の瓦が出土する多慶瓦窯が存在しているが、基本的には同一丘陵上に展開する一連の瓦窯ととらえられるため、時期を経るにしたがって、多慶瓦窯から金丈里瓦窯へと生産の中心地が移ってきたと考えられる。

金丈里瓦窯から出土した瓦は既に『新羅瓦磚』²⁵などで紹介されている。筆者も、その一部を国立慶州博物館において実見することができた。そこで得られた印象としては、文様の多彩さもさることながら、製作技法や使用されている胎土などについても、実に多様性にあふれている²⁶。すなわち、1つの工人集団が多様な瓦を製作しているのではなく、複数の工人集団がそれぞれ独自に瓦を製作した結果、多様性が見られるようになったと考えられるのである。

また需給関係についても、既に指摘されているように月城や雁鴨池、また一部は皇龍寺や芬皇寺に瓦が供給されている。このように、単一の供給先をもつのではなく、複数の供給先、しかも寺院に限らず都城域へも供給していることから、寺院などの専属瓦窯ではなく、瓦生産の中心地として慶州全域に広く瓦の供給をおこなっていたことが窺えよう。

(3) 小 結

慶州地域においては、これまでにまとまった発掘調査がおこなわれた寺院が少ないため、全体として寺院所用瓦の情報は乏しい。そのため、今回は筆者が出土瓦を実見できた寺院を中心に述べざるを得なかった。したがって、管見の限りとなってしまうが、以上で述べてきたことを簡単にまとめておきたい。

まず、皇龍寺や芬皇寺のような創建が7世紀に遡る寺院においては、軒丸瓦と軒平瓦の

セット関係は成立しておらず、しかも文様の種類が多岐にわたるため、1つの建物において複数の文様の軒瓦が使用されていたことが想定できる。しかし、これが四天王寺や仏国寺のように、やや時代が降るにつれ、文様のバリエーションは少なくなっていき、建物に用いられる軒瓦の文様が統一される方向に向かっていくようである。また、軒丸瓦と軒平瓦についても、四天王寺で顕著なように同一の工人集団によって製作されていることから、両者の間にセット関係が成立していく状況も見てとれる。すなわち、統一新羅の寺院所用瓦は多様性から統一性へと向かっていく傾向が指摘できるのである。

もちろん、この多様性から統一性への変化は、造瓦体制そのものの変化に結びついているものと考えられる。瓦窯の状況についてはまだまだ不明な部分も多いが、金丈里瓦窯の状況を見る限り、8世紀の段階では寺院専属の瓦窯としては機能しておらず、都城をも含めた複数の供給先をもっている様相が確認できる。そして、供給先である寺院の状況を顧みると、皇龍寺や芬皇寺で見られた多様性は、1つの瓦窯からの供給だけではなく、多数の瓦窯から瓦を入手していたことを示している²⁷。

そしてこれは、亀田修一が百済・扶余地域の分析で明らかにした「複数瓦窯複数寺院型」²⁸とほぼ同じ様相を示しているのである。亀田はこの複数瓦窯複数寺院型が成立する背景として、扶余のほとんどの寺院の造営において、国家または王家が関わっていたと推定する²⁹。これは、皇龍寺や芬皇寺の成立事情を鑑みると、同様の指摘が可能かもしれない。すなわち、『続高僧伝』に記されているように、「寺は王の造るところ」であり、国家主導によって大規模な寺院造営がおこなわれた結果、複数の瓦窯から瓦が調達され、またそれらの瓦窯が複数の寺院に瓦を供給することによって、結果的に非常に多様な瓦が1つの寺院に用いられる結果になったのである³⁰。

しかし、これが時期を経るにつれて、様相が変化してくる。すなわち、バリエーションの減少とそれにとまなう文様の統一性や、セット関係の成立である。これは、むしろ日本の寺院における瓦のあり方に類似してくることが指摘できる。四天王寺や仏国寺に瓦を供給していた瓦窯の状況がまったくわからないため、あくまで想定の域を出ないが、8世紀も後半に入ると、瓦窯と寺院の関係に変化が生じていたのではなかろうか。すなわち、複数の瓦窯から複数の寺院に供給するのではなく、日本同様、寺院専属の瓦窯が成立していた可能性がある。特に仏国寺では複弁を基調とする重弁軒丸瓦が主体であるが、これらは他の慶州地域の寺院では決して主体にはならない。同様の指摘は四天王寺の忍冬文軒平瓦についても可能である。以上のことから、少なくとも8世紀後半以降の寺院においては、複数瓦窯複数寺院型ではなく、1寺院1瓦窯が成立していた可能性を指摘するとともに、今後の瓦窯の研究の進展を待って、改めて論じることにはしたい。

4. まとめ

以上、日韓両地域の造瓦体制について、整理をおこなった。すなわち、日本においては「造寺司」なる寺院造営の専属組織を設けることによって、寺院の独自性を保ちつつ、かつ他の造寺司や平城京の造瓦体制とが互いに影響を与えながら展開していった状況を見て取ることができた。一方、慶州地域においては複数瓦窯複数寺院型といった、寺院や都城も一体となった造瓦+供給体制を取っていたため、寺院の独自性はさほどなく、かつ軒丸瓦と軒平瓦のセット関係も不分明なままであった。しかし8世紀後半以降、セット関係が確立していくと共に、寺院の独自性が徐々に表れてくることから、日本のような寺院造営の専属組織が成立しつつあった可能性が指摘できる。

それでは、日本と朝鮮半島でこのような差が生じた原因は何にあったのであろうか。

1つは、寺院造営に関する組織の成立状況の差によるものと考えられる。日本においては、6世紀末の飛鳥寺以降、7世紀後半の官寺の成立まで、寺院はすべてからく氏寺であり、その造営は各氏族ごとにおこなわれることから、寺院造営組織の個性が高かったことが窺える。それが、7世紀後半以降においても、寺院造営組織は寺院に専属するものといった伝統を受け継ぎ、その個性を維持していったと考えられるのである。一方、朝鮮半島においては、慶州地域にとどまらず、その前段階たる百濟地域においても、「基本的に王家や官と関わりを持つ寺院が多かったと考えられる」ため³¹、王宮や寺院に用いられる瓦は王家所管の複数の瓦窯から供給され、結果的に複数瓦窯複数寺院型といった造瓦+供給体制が成立していたと考えられよう。

そしてもう1つ、建物に関する瓦の用い方の伝統の差も影響していたことであろう。先に、日本の寺院ではセット関係が明瞭であると述べたが、それはすなわち、一つの建物の瓦を統一した文様で飾るという意図の現れである³²。そして、それを可能にしたのが当初の寺院が氏族による造営である点と、寺院造営が個性を持っておこなわれたという2つの要因である。すなわち、建物の瓦を寺院ごとに統一するといった行為は、他の氏族との区別を明らかにすると共に、氏族間関係を明示する手段でもあったのである³³。一方、朝鮮半島の寺院で複数の軒瓦が一つの建物に用いられているのは、やはり寺院ごとの個性が問われなかった点が大きかったのであろう。いずれも、王家や官に関わりのある寺院であったため、寺院ごとの独自性が強調される必要もなく、造瓦体制そのものも個別的生産体制ではなかったため、結果として、複数の軒瓦の使用が当然のこととして受け止められてきたのであろう³⁴。それが変化するのが8世紀後半以降のことであり、やはり護国鎮護を契機として造営された四天王寺や、統一新羅後半期において最も隆盛を誇った仏国寺では、他の寺院とは一線を画する必要性が生じたため、独自の文様と独自の寺院造営組織を有する

に至った可能性が指摘できよう。

このように、7～8世紀の日本列島と朝鮮半島において、同じ仏教を基調とする寺院の造営に関しても、その導入や歴史的背景に応じて、それぞれの地域において独自の展開を見せることとなったのである。

5. おわりに

以上、多少雑駁な感はあるが、日本列島と朝鮮半島の寺院造営のあり方において比較検討をおこなった。結果、両地域の共通性と独自性が明らかになったわけであるが、朝鮮半島において筆者が確認できた瓦は全体のごく一部に過ぎず、まだ発掘調査がおこなわれていない寺院も多数あり、筆者が述べてきた見解の多くは、今後の調査の進展を待って再検討されるべきであろう。

とはいえ、現段階で検討すべき問題点について、本稿では可能な限り整理したつもりである。これが、今後の日本列島と朝鮮半島における瓦研究の一助となることを祈りつつ、今回はこの辺りで筆を置きたい。

註

- 1 上原真人「初期瓦生産と屯倉制」『京都大學文學部研究紀要』第42号、京都大学文学部、2003年。
- 2 奥村茂輝「奈良時代の瓦窯」『造瓦体制の変革－畿内－』帝塚山大学考古学研究所、2007年。
- 3 なお、平城宮と寺院の瓦については、既に森郁夫の論考がある（森郁夫「平城京における宮の瓦と寺の瓦」『古代研究』8、(財)元興寺仏教民俗資料研究所考古学研究室、1976年）。しかし、氏の論考から既に30年が経過し、新たな成果が明らかとなっている部分も多いので、今回改めて再整理するものである。なお、そのうち大安寺と元興寺の箇所については、中井公の論考の多くを参考にさせていただいた（中井公「平城京初期官寺の建立と瓦生産」『古文化論叢』伊達先生古希記念論集、同刊行会、1997年）。
- 4 中井 公「法華寺創建軒瓦と「大安寺式」軒瓦」『地域と古文化』同刊行会、2004年。
- 5 花谷 浩「出土古瓦よりみた本薬師寺堂塔の造営と平城移建について」『展望考古学』考古学研究会、1995年など。
- 6 梅谷瓦窯では奈良時代初頭としては異例の一枚作りの平瓦が生産されている（(財)京都府埋蔵文化財センター『平城山瓦窯跡群』京都府遺跡調査報告第27冊、1999年）。これも、興福寺所管瓦窯の特異性を示す一例といえよう。
- 7 この『造金堂所解』の記述がいかなる建物の造作に関する記述なのかについては、見解が分かれるところである。黒田洋子などの文献史学者の中には、法華寺金堂造営文書とする説が主流であるが（黒田洋子「正倉院文書の一研究－天平宝字年間の表裏関係から見た伝来の契機－」『お茶の水史学』第36号、1992年など）、奥村茂輝は瓦窯と文献の比較検討から阿弥陀浄土院の造営文書とする説を唱える（奥村茂輝「法華寺阿弥陀浄土院の造営」『佛教芸術』275号、毎日新聞社、2004年）。筆者は奥村の説にはまだ再検討の余地があると考えため（註18参照のこと）、この場では法華寺金堂造営文書説の立場をとる。詳細は稿を変えて論じることにした。
- 8 法華寺全体の軒瓦の変遷については別稿を期したい。

- 9 具体的には6285B・6320A-6691Aや、6308A-6663Aがある。前者は生産されていた瓦窯こそ不明なもの、平城宮からもかなりの数が出土している。また、後者については中山瓦窯産である。この他、皇后宮職と関連する瓦窯として歌姫西瓦窯があげられるが、この瓦窯では平城宮内裏にも瓦の供給をおこなっていたようである。
- 10 毛利光俊彦・花谷浩「屋瓦」『平城宮発掘調査報告XⅢ』奈良国立文化財研究所学報第50冊、奈良国立文化財研究所、1991年。山崎信二「東大寺式軒瓦について」『古代瓦と横穴式石室の研究』、同成社、2003年。
- 11 山崎信二「東大寺式軒瓦について」（前掲註10）。
- 12 上原真人「前期の瓦」『平安京提要』角川書店、1994年。
- 13 小澤 毅「西大寺の創建および復興期の瓦」『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』西大寺、1990年。
- 14 造寺司の最古のものとしては、推古四年（596）に設置された法興寺（＝飛鳥寺）の「寺司」がある。ただし、この段階では既に「法興寺造り竟りぬ」とあるので、法興寺そのものの造営ではなく、周辺の伽藍整備や寺院維持を目的とした組織であった可能性がある。また、弘福寺（＝川原寺）の造弘福寺司については、文献の初現が天平十五年（743）と遅れるが、一応存在していたことが知られる。また造薬師寺司については、大宝元年（701）と養老三年（719）にそれぞれ設置記事があるが、前者が藤原京において、後者が平城京においてそれぞれ設置されたとも解釈できるが、先にも触れたように、基本的には同一組織によって本薬師寺と平城薬師寺がそれぞれで造営されたことを指していると考えておきたい。
- 15 例えば、先に触れたように、造香山薬師寺所は造東大寺司の下部組織であったし、興福寺のように造東大寺司に瓦の借用を依頼している寺院もある。
- 16 奥村茂輝「奈良時代の瓦窯」（前掲註2）。
- 17 （財）京都府埋蔵文化財センター『平城山瓦窯跡群』（前掲註6）。
- 18 この6732Fは凸面に縦方向の縄叩きが見られる。すなわち、6732F自身は東大寺系とされる軒平瓦であるが、その製作技法は平城宮系と同様である。したがって、奥村の言うように造東大寺司の直接的な関与は考えにくいであろう（奥村茂輝「法華寺阿弥陀浄土院の造営」（前掲註7））。
- 19 ここに見る「唐伝」は『続高僧伝』のことである。『続高僧伝』が唐代に道宣によって記されたことから、そのように表現されている。
- 20 朴恩辰「芬皇寺 출토 수막새 編年研究」『芬皇寺』特別展図録第2冊 国立慶州文化財研究所、2006年。
- 21 国立慶州文化財研究所『芬皇寺』2005年。
- 22 特に統一新羅以前の、いわゆる古新羅の段階では軒平瓦そのものがごくわずかしき出土していない。したがって、「セット」なる概念は古新羅の段階には存在していなかったといえる。
- 23 また、四天王寺からは草葉文の軒平瓦も出土しているが、これは複弁蓮華文軒丸瓦の②の技法と共通した接合法が用いられている。
- 24 慶州大学校博物館『慶州 佛國寺 境内 聖寶博物館 建立豫定敷地 発掘調査報告書』2006年。
- 25 国立慶州博物館『新羅瓦塼』2000年。
- 26 典型的な例として、瓦範を取りあげてみよう。金丈里瓦窯からは陶製の瓦範が出土しているが、出土瓦の多くは明らかに木製の瓦範を用いている。すなわち、陶製瓦範を使う工人と木製瓦範を使う工人が併存していたことは確実である。
- 27 金丈里瓦窯の多様性を見てみると、金丈里瓦窯そのものが複数の瓦窯を含むものであり、そこに多数の工人組織が活動していた状況が想定できるのではなかろうか。つまり、日本における平城山瓦

窯跡群がよりコンパクトにまとまったものが、金文里瓦窯と推定されるのである。

- 28 亀田修一「熊津・泗泚時代の瓦」『日韓古代瓦の研究』吉川弘文館、2006年、p.155。
- 29 亀田修一「熊津・泗泚時代の瓦」（前掲註28）。
- 30 慶州と扶余の地域の造瓦供給体制が類似している点は興味深い。慶州の瓦生産の開始には百済地域からの大きな影響があったことであろうから、扶余地域の造瓦供給体制そのものが、慶州の造瓦供給体制のモデルになっていた可能性は高い。
- 31 亀田修一「熊津・泗泚時代の瓦」（前掲註28）、p.156。
- 32 日本でも、6世紀末から7世紀初頭に造営された寺院の中には、1つの建物に複数の文様からなる軒丸瓦や軒平瓦を飾るケースがある。そのような寺院として、大西貴夫は豊浦寺や斑鳩寺をあげている（大西貴夫「軒瓦の出土状況からみる飛鳥時代寺院の造営」『考古学ジャーナル』No.576、ニューサイエンス社、2008年）。大西はその要因として、造営計画や造営者の強い一貫性の欠如をあげているが、むしろ百済の伝統的な発想、すなわち1つの建物を1つの文様で統一しないといった発想が、そのまま移植された結果と考えることもできるのではなかろうか。
- 33 7世紀によく指摘される山田寺式軒瓦や法隆寺式軒瓦の分有関係は、それらを顕著に示すものといえよう。
- 34 そもそも、1つの建物を1つの文様で飾るといった発想は日本独自のものである可能性が高い。朝鮮半島のみならず、中国においても明瞭なセット関係や所用瓦を抽出するのは困難なのではなかろうか。中国の状況においては、今後の検討課題としたい。

図版出典

- 第1～8・10図：奈良国立文化財研究所『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』1996年より抜粋、転載
第11図：朴2006年、表8を転載
第12図：国立慶州文化財研究所・国立慶州博物館『四天王寺』2009年より抜粋、転載
第13図：慶州大学校博物館2006年より抜粋、転載

韓日 두 지역의 寺院 造瓦체제 비교 연구
- 8세기를 중심으로 -

林 正憲 (하야시 마사노리)

요 지 일본 열도의 寺院은 官寺 성립과 더불어 造寺司라는 寺院 造營 전담 조직이 설치되었다. 이 造寺司의 활동은 각 寺院의 역사적 배경과 그 전개에 따라 다른데, 대개 平城宮의 造瓦 체제와는 일정한 거리를 두며 독자성을 갖고 전개한 모습을 엿볼 수 있다. 그러나 奈良시대 후반에 造東大寺司가 성립하면서 그 영향은 각 寺院뿐만 아니라 長岡京와 平安京에까지 미쳤던 점이 밝혀졌다. 한편, 한반도 寺院에서는 일본에 비해 각양각색의 기와를 쓰는 것과 더불어, 일본에서는 일반적인 '軒瓦' 세트 관계를 볼 수 없는 상황이 확인된다. 하지만 이것이 8세기 후반이 되면 세트 관계를 볼 수 있는 寺院이 출현하여 造瓦 체제에 어떠한 변화가 생겼던 점을 지적할 수 있다. 그리고 金丈里瓦窯 상황에서도 또한 다양성을 지적할 수 있어 일본 瓦窯 방식과 다른 것을 알 수 있다. 그리고 두 지역의 비교를 통하여 서로의 지역에서 이와 같은 차이가 발생한 원인으로, 일본 열도에서는 官寺 성립 이전 상황에 크게 영향을 주었다는 점, 그리고 경주 지역에서도 그 造瓦 체제의 연원이 되는 백제의 造瓦 체제 영향이 컸다는 점을 지적하였다. 그 결과 건물에서의 軒瓦 문양 통일성 등에 대한 의의에 대해 두 지역에서 크게 달라진 상황에 이르게 된 것이다.

주제어 : 造寺司 瓦窯 세트 관계 複數瓦窯複數寺院型

Comparative Study of Production Systems of Roof Tiles for Buddhist Temples in Korea and Japan in the Eighth Century

Hayashi Masanori

Abstract: In Japan, special offices called *zōjishi* were set up to supervise construction whenever state-sponsored temples were established. Although the activities of each office varied with the historical background and development of the temple concerned, on the whole they may be seen as maintaining some independence from the production system for roof tiles for the Nara palace, and to have developed in uniquely differing ways. But once the Tōdaiji Construction Office was established in the latter half of the Nara period, its influence clearly reached not only every other temple but also later work done on the Nagaoka and Heian capitals. For Buddhist temples on the Korean peninsula, however, in comparison with Japan not only was a great variety of styles of roof tiles in use, but the general practice of using specific styles of round and flat eave tiles in sets was also not seen. But in the latter half of the eighth century, temples appeared showing tiles used in sets, and some kind of change in the system for tile production may be indicated. Considerable variety has been pointed out for the Geumjang-ri kiln as well, and differences from the Japanese mode of tile production are visible. From a comparison of the two regions, the considerable effects in Japan still exerted by conditions prior to the establishment of state-sponsored temples, and in the Gyeongju area of Korea, the strong influence on its tile production mode from the Baekje system that was its source, are indicated as reasons why these differences came about. As the result, ways of thinking about standardizing the patterns of eaves tiles came to diverge greatly between the two regions.

Keywords: *Zōjishi* (Temple Construction Office), roof tile kilns, sets of flat and round eave roof tiles, temple roof tile production system (multiple kilns, multiple temples)